

2014年5月25日 15時～16時30分

東大農学部1号館8番教室

村民との対話「福島・飯舘村再生の意味」

Fグループ:山津見神社の復興・再生を通して村の再生の意味を考える

◇飯舘村から参加

菅野永徳さん(山津見神社総代・佐須地区農家)

佐藤公一さん(山津見神社総代・佐須地区長/農家)

◇会場から参加

加藤久美さん・サイモン ワーンさん(和歌山大・山津見神社オオカミ絵の調査研究)、陣内利博さん(武蔵野美大・再生の会CIデザイナー)、青木利夫さん(文教大、ジャーナリスト)ほか10名

◇対話の経緯

公一さん:2011年4月20日に専門家の先生から大丈夫ですよとの助言が村民にあった。日本政府が来て避難の指示をしたのがその2日後だった。までいな生活を生きて来た私たちだったのだが。神社の参道には村民自身が露天商に頼らずに出店する伝統があった。それだけご眷属様(ごけんぞくさま=オオカミ)が村に定着していたということです。

永徳さん:66戸で支えているのが山津見神社です。学校も神社も文化を運んでくるという共通点を持っています。分校が廃止されて神社が残ったのだが。その神社の拝殿が2013年4月に焼失しました。村民の留守を守ってくれていた宮司夫人が亡くなりました。これから神社を崇敬する方々を増やして観光に結びつけたいです。いろいろなアイデアがほしいです。総代のひとりとして思うことです。

加藤:1905年東吉野村鷲毛口で最後のニホンオオカミが捕獲され絶滅しました。この年に山津見神社にオオカミの天井絵が奉納されました。神社は人が集い土地と人をつなぐところ。環境基金の助成を受けていま調査を進めています。山津見のオオカミは相馬中村の絵師が描いたと推定できます。

サイモン:活動の記録・思い出の記録が大切です。文化財が危険に晒されているというのがオオカミの天井絵撮影の動機でした。拝殿焼失の二ヶ月前でした。

司会:オオカミの天井絵を復刻し新拝殿に奉納する事業をふくしま再生の会が進めています。

陣内:天井絵の復刻について。100年以上前に相馬の絵師がオオカミを描いた時代と現代では美術を巡る環境に大きい変化がある。現代では少数の絵師ではなくより多くの人びとがコンピュータを使った「絵筆」を手に行っている。この環境を新しい文化として受けとめて体験をしながら集うというロジックを創造できるのではないだろうか。

青木:自分には飯舘村の災害と戦争の災害がどうしても重なってしまう。ついつい死というものを考えてしまう。戦争中に動員されて零戦の部品を作っていた。特攻隊の青年たちを思い出します。

永徳さん:山津見神社への講中は全国に広がっています。安全を祈願するために山おろしをするのです。

参加者:伝統をしっかり伝承することが大切ではないですか。

◇司会によるまとめ

都会の人びとが失ってしまった世界の大きさをあらためて思い知らされました。しかしその中でも陣内さんが提起した新しい体験共有と集いのロジックは一考に値すると思われ。永徳さんの問いかけに応えるのはこれからの課題となりました。(文責:司会・若林一平)